アヴェスター語詞 sūra- について

森　茂　男

Av. sūra- の一般的解釈は、OInd. śūra-, Gk. kúrios 'powerful' に対応するとして、語義を「強い」とする。その印欧語根を *¹kew- 'schwellen' に求める（Pokorny 592, etc.）。Avestā において sūra- は epithet として使用される事例が全てである。その為同説に対する反論は過去に J. Hertel とその同調者によって行なわれたのみで、今日のイラン学者は一様に「強い」説に立つ。[1] だが同説には幾つかの致命的限界が存在する。

その一つはušah-sūra-（Vid. 18, 15; F. 276; Yt. 5, 63）の解釈。現在二説が存在し、一方は「強い曙」と解する。他方は sūra- を svar- 'Morgen' の thematized form と見做し「朝の曙」とする。[2] しかし後者は曙の属性として「強い」が妥当性を欠くために提出されたもので、基本的には「強い」説に立つ。前者の誤りは「強い」を ušah- の epitet とした点にある。OInd. úṣas- は曙光神として Ṛgveda に見えるが、その本質的特徴は光り輝く様態にある（cf. ṚV. I, 48, 1, etc.）。[3] 当然かかる epithet を最も多く持つ。一方 Av. に見える限り ušah- は自然現象の曙を指す例がほとんどで、神格とする讃歌でも輝く神として描く（Gāh 5,5）。「強い」説は sūra- との語形類似以外に積極的根拠は無い。「朝の曙」説は「男の少年」の類の論理で無意味。仮説として sūra- を「輝く」の意味に解したい。

sūra- が amavant- と並置された箇所がある。Yt. 8, 4 'tištrīm stārəm raēvantəm xᵛarənaŋhantəm……sūrəm bərəzantəm amavantəm……'（燦然と輝きフワルナフを持つ Tištrya-星、……sūra- なる背高く力強い〔その星を〕）において sūrəm 以下は Tišt. の epithet 列挙から成る。Tišt. の最も重要な属性がその輝きにあることは言う迄もない。だが sūra- を通説に従うとこの属性の記述欠除、「強い」なる属性の重複、という非常に不合理な解釈に陥る。epithet 列挙から成る Text において、同一文中に同じ属性の epithet が隣接乃至近接位置で操返し現れることは見られないからである。強調表現技法としての重複はたいてい〔原級的価値〕＋〔最上級的価値〕の形をとる（cf. sūra- səvišta-, uγra- uγrōtəma-, etc.）。[4] 故に sūra-, amavant- を強調表現の一つと見ることはできず、まして sūra- = amavant- は誤りとせざるをえない。ところで 'amavaitīm xšōiθnīm bərəzaitīm'（Yt. 5, 15）なる Anāhitā の epithet 列挙が存在する。xšōiθnī- は「輝く」の意。すると筆者の仮説によれば Yt. 8, 4 と Yt. 5, 15 はある定型表現に従った類似表現と見做せる。従って sūra- を「輝く」と解することで Yt. 8, 4 は合理的解釈を得ることができよう。

さて sūra- =「輝く」の語源は次の通り。[5] OInd. śukrá-, śubhrá- は IE. *kwkʷ-ro-, *kwbh-ro- に遡り、語根は *kwkʷ-, *kwbh-（>śuc-, śubh-）。これらは *²kew- に語根拡張素 *kʷ-, -*bh- がついたもの（*kewkʷ-eti >śócati, *kewbh-e-tei>śóbhate）。語根拡張素には laryngeal の H も含まれる（cf. *gʷmH-> gā-, *gʷem-> gam-）。故に *²kw-+H>*kwH- も理論的に存在し、OInd. śvás-

(śuvás-)＜*kwH-es-, Av. sūirya-「朝食」＜*²kwHr-yo-（Av. vsar-＜*²kwHer-, cf. Olnd. svár-: sūryá-＜*swHel-: *swHl-yo-）等の語根として認められる。上述例から解る様に -*ro- は語根の弱階梯につく（Wack.-Debr. II-2, 852）。これより *²kwH-ro-＞Av. sūra-「輝く」という形容詞が導かれる。同時に Av. *sū-「輝く」という動詞語根も設定できよう。

次に sūra-「輝く」が持つ神格の epithet としての妥当性について粗描する。Ahura- Mazdā- も sūra- なる epithet をとる（Yt. 1, 15）。一方 Vid. 19, 23 には「輝く者により造成された光明の（sūrō.θ warštanąm raočanhąm）」なる句が見える。後期ゾロアスター教文献の Bundahišn TD_2, 11_{2-4} には、Ohrmazd は有象世界の光明（gētīg rōšnīh）を創成したとある。また同書 TD_2, 2_{12} では、同神が無始光明（asar rōšnīh）と同一視されている。更に Pahlavī Rivāyat accompanying Dādestān i Dēnīg なる文献では、光明は無始光明である abzār から創造されたとある。abzār は Zand において sūra- の訳語として用いられているので sūra-＝「無始光明」のこと。すると sūrō.θ waršta- とは「Ah. M. により造成された」と同義になる。これから上記引用のゾ教テキストが Vid. 19, 23 の引用句の中世ペルシア語的表現であることが解る。以上より sūra- がゾ教の伝統において「輝くもの」の意味に理解されていたことは明白であろう。従って Ah. M. の epithet たる sūra- を「輝く」の意味に解すことができる。戦闘神としても知られる Mithra も sūra- を epithet にとる。同神は光明神としての重要な側面を有する。例えば、その顔は Tištrya 星の如く輝く（Yt. 10, 143）とか、肢体は輝き、月の如く光明を授けられている（Yt. 10, 142）などの叙述がある。然るに sūra- を通説に従えば、かかる側面を表示する epithet が存在しないという不合理な結果に至る。最後に Anāhitā は Av. において Arodvī Sūrā Anāhitā と招呼されている。同神は戦闘神でもあるので、sūra- をかかる側面の epithet とされてきた。だが一方において同神は黄金の如く光り輝く衣裳をつけていると詳細に述べられている（Yt. 5, 126-129）。また同神の居処は星にあるとされる（Yt. 5, 85）。ちなみに MPers. Anāhīd / NPers. Nāhīd はもつぱら金星の意味に使用されている。以上より、sūra- を同神のかかる様態を示す epithet と考える。

以上、Av. sūra- の語義は「輝く」であることを要約して論証した。詳細は他の機会に発表したい。

1 E. Benveniste, *Le vocabulaire des institutions en indo-européennes*, Paris 1966, II, pp. 183-184 に詳しい論述がある。

2 Barthalomae, *Air Wb.* 415, 及び I. Gershevitch, *Avestan Hymn to Mithra*. Cambridge 1959, p. 288 などを参照。

3 Naighaṇṭuka I, 8 に見える Uṣas の epithet 一六個のうち「輝く」の意味範疇に属するのは七個ある。cf. J. Gorda, *Epithets in the Ṛgveda*, The Hague 1959, p. 96ff.

4 典例は Yt. 13, 75; Yt. 3, 5, etc.

5 Olnd. śúra- の語構造との類推は非常に参考となる。cf. M. Mayrhofer, *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*, III, s. v. śúraḥ, śávaḥ², śávīraḥ, śúṣáḥ, śváyati, śváḥ, etc.

6 との問題について、J. C. Tavadia, *Studia Indo-Iranica, Ehrengabe für W. Geiger*, Leipzig 1931, S. 239ff. を見よ。